

卒業論文

テーマ：『負け犬の遠吠え』は真実か
知識社会学の視点から解析する

学籍番号 12012062

氏名 田中文恵

指導教員 立木茂雄

< 目次 >

第1章 序論 研究の背景

1.1 動機

1.2 研究目的

1.3 分析手順・検証された命題

第2章 先行研究の展望

2.1 現代日本の結婚事情

2.2 家族社会学の視点から見る日本の結婚・家族の歴史

(1) 「普通」の結婚、家庭

(2) 「近代家族」について

(3) 「妻 = 専業主婦」規範

(4) 核家族が主流になった原因

(5) 子供の数の画一化

(6) まとめ

2.3 『負け犬の遠吠え』以前の著作物について

(1) 『クロワッサン症候群』について

(2) 『<非婚>のすすめ』、『パラサイト・シングル時代』について

(3) 『結婚の条件』について

(4) まとめ

2.4 イデオロギー解析へのアプローチ

(1) 知識社会学について

(2) 「負け犬」の定義とその流通についての仮説

第3章 『負け犬の遠吠え』のイデオロギー解析

3.1 「負け犬」の定義

(1) 学歴・職業・賃金から見る「負け犬」の実態

(2) 「負け犬」の定義における方法論的欠陥

(2) まとめ

3.2 「負け犬」についての記事掲載数・掲載雑誌から見るメディア戦略

(1) 記事総数

(2) 掲載雑誌からみえる傾向

(3) 新聞記事掲載数からみえる傾向

(4) 朝日新聞の読者層

3.3 まとめ

第4章 考察

(1) 「負け犬」は真実だったか

(2) これからの女性の生き方

参考文献・引用文献

第1章 序論 研究の背景

1.1 動機

私がどのようにして「負け犬」という概念に出会ったかということ、大学3年生の後半から購読していた「AERA」(朝日新聞社)と言う雑誌の紙上において、2004年3月頃から「負け犬」を巡っての論争が起こっていたからである。「負け犬」という概念は、もともと『負け犬の遠吠え』という本を著した酒井順子が生み出した言葉であり、「30代以上の未婚、子無しの女性」(酒井順子 2003)を指す。この『負け犬の遠吠え』で述べられているのは、「負け犬」がどのように社会で生活しているか、という実態から、どのように考え生活すべきか、という一種の処世術である。そして結婚していないから負け、と決め付ける社会に対しては、「負けていない」と反発するより、「負けました」と負けを認めてしまう姿勢をとった方が楽ではないか、と呼びかけている。

「AERA」紙上では、「負け犬」と言う考え方についての賛否から、「30代以上、未婚」の男性についての特集、「負け犬」の親の意見など、「負け犬」について幅広い議論がなされていた。

私が何故それに興味を持ったかということ、自分自身があと10年もたたないうちに30代に突入し、「結婚」や「出産」について考え出さなくてはならないのではないか、という考えを持っているからである。最初は「自分も負け犬になるのではないか?」という不安から、それらの記事を読んでいた。しかし、だんだんと、何故「結婚していない=負け」という考え方が出てきたのか?ということや、「負け犬」と言われるような女性は、本当に全員が、メディアで取り上げられるような生活をし、酒井が述べているような考え方を持っているのだろうか?ということに対して疑問がわいた。

何故「負け犬」の考え方が出てくるに至ったのか、「負け犬」という存在は本当に存在するのか、ということを探るために、これを卒業論文のテーマに据えた。

1.2 仮説・研究方法

私が購読していた「AERA」や、『負け犬の遠吠え』の中で、「負け犬」は現在非常に増加していると述べられている。また、「負け犬」はマンションを持っていたり、ブランド物を沢山持っていたりと、裕福な人が多いような描かれ方をしている。しかし、本当にそのような人が、多数派になりつつあるのだろうか。雑誌で取り上げられるのはごく一部の

限られた人なのではないだろうか。

このような疑問から、本稿では、酒井が述べているような「負け犬」は、「30代以上の未婚女性」の同意語にはならないのではないかと、という仮説をたてた。

この仮説を検証するために、「負け犬」にあたる女性が日本社会にどの程度存在するのか、そしてそれは一般化するのに十分な数か、ということ、を、数値的データを用いて検証する。

また、「負け犬論争」といわれる現象が起こったが、これはどの程度の規模で起こっていたのだろうか。ここで、「負け犬」についての定義と同じく、「負け犬論争」も、限られた範囲でしか起こっていないのではないかと、言う仮説をたてた。これについては、新聞・雑誌の掲載数や、掲載紙の読者層などのデータを用いて、「負け犬」についての記事がどれだけ書かれたかや、掲載雑誌や新聞などの傾向をみることにより、「負け犬」という考え方がどのように流通していったかを明らかにすることで検証する。

仮説をたてるにあたっては、知識社会学の概念を参考にしている。

1.3 本研究の意義・命題

「負け犬」という考え方が出てくる背景には、「結婚していることが勝ち = 正しい」という考え方が存在している。このイデオロギーがどのように生まれたか、そして何故定着しているのかを調べることで、今後の女性の結婚観や家族観がどのように変化していくのか、という可能性を示すことができると考える。

また、ふたつの仮説を検証することによって、「負け犬」という考え方が流通するにいたった社会的装置を明らかにし、さらに社会において知識がどのように発生し、広がっていくかということ、を明らかにすることができるかと考える。

「負け犬」という存在はどのように生まれ、社会の中で現在どのような位置を占めているのかということと、「負け犬」という一種の知識が、社会で流通した背景を明らかにすることが、本稿の命題である。

第2章 先行研究からみる日本の家族・結婚

2.1 現代日本の結婚事情

この項では、『負け犬の遠吠え』が描かれる背景となった、現代日本の結婚事情について考察する。

平均初婚年齢の推移をみると、図 2-1 に示すように、1970 年ころから男女ともに初婚年齢が上昇している。

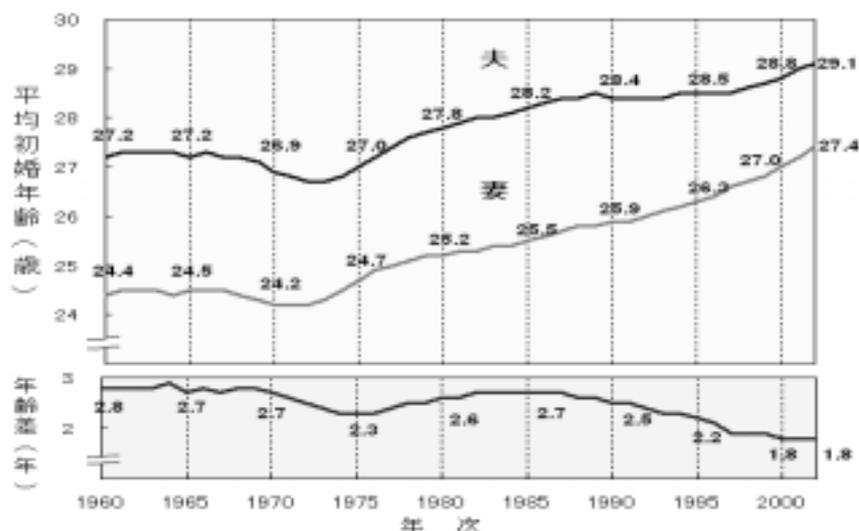


図 2-1 平均初婚年齢の推移

(出典：厚生労働省 2000「平成 14 年度 人口動態統計」)

また、晩婚化とともにやはり 1970 年ころから未婚化も進んでいる。未婚化とは、未婚者（一度も結婚していない者）の割合が増えることである。女性の 20 代後半では、1970 年から 2000 年の間に未婚率は 18.1%から 54.0%へと 3 倍に増えている。また、男性の 30 代前半では同じ時期に 11.7%から 42.9%へと、やはり 3 倍ほど未婚率が伸びている。これらの晩婚化・未婚化に合わせ、出生率も低下している。

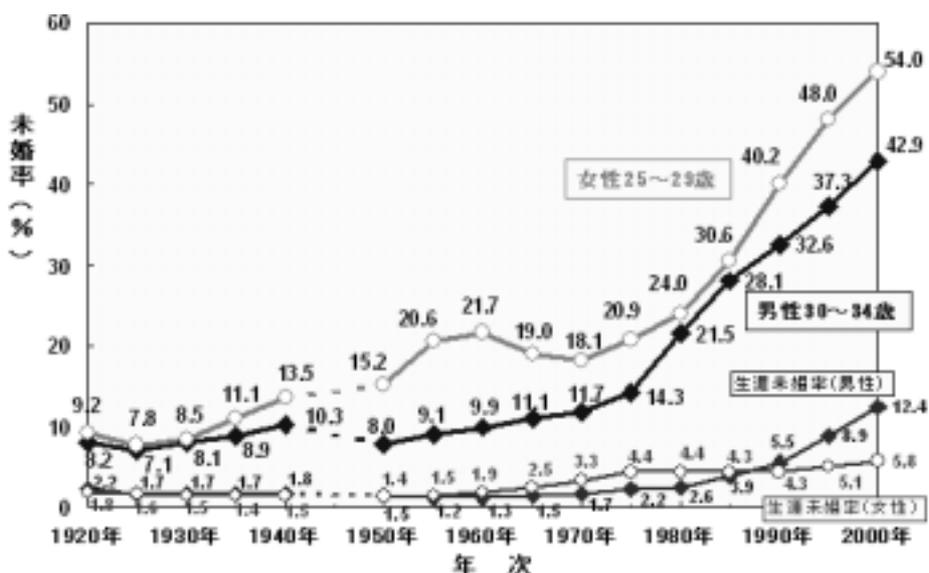


図 2-2 年齢別未婚率の推移

(出典：国立社会保障・人口問題研究所 資料：総務省統計局 2000年「国勢調査報告」)

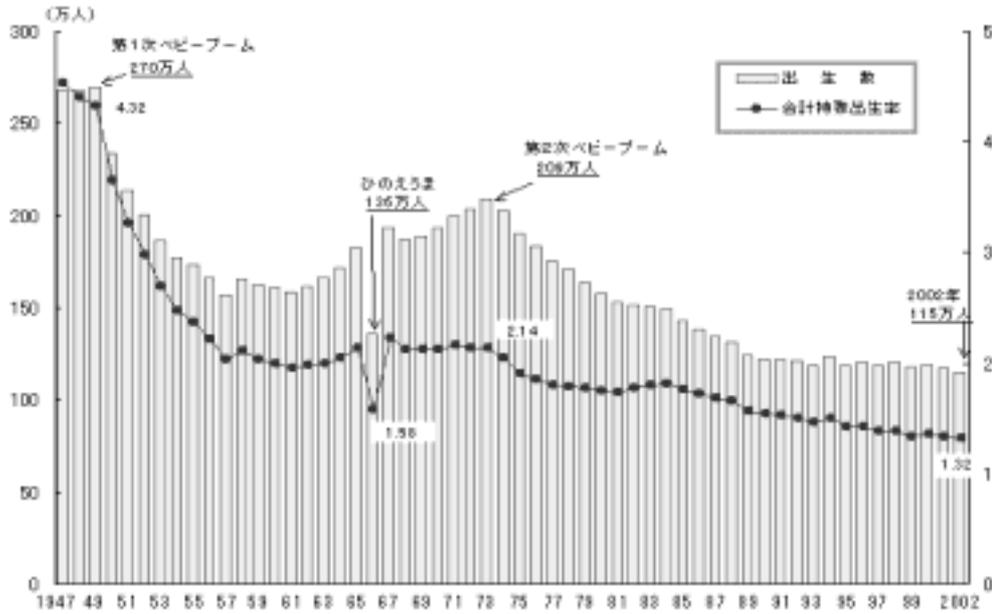


図 2-3 出生率・合計特殊出生率の推移

(出典：国立社会保障・人口問題研究所)

しかし、未婚化・晩婚化が進んでいるとはいえ、現在未婚である人が将来結婚する気がない、というわけではない。表 2-1 が示すように、「いずれ結婚するつもり」と言う人は、男女ともに 10 年前と比べてわずかに減少してはいるが、「一生結婚するつもりはない」という人は、10 年前と大した変化はない。『負け犬の遠吠え』にある、「30 代以上の未婚、子ナシの女性」は負けている、またマイノリティである、という意見が未婚者の多くに受け入れられたのは、現代の日本ではこのように「結婚したい」と思っている人が大部分を占めている事実が背景にあるためだと思われる。

表 2-1 年代別未婚者の生涯の結婚意志

< 男性 >

生涯の結婚意志	1992 年	1997 年	2002 年
いずれ結婚するつもり	90.0%	85.9	87.0
一生結婚するつもりはない	4.9	6.3	5.4
不詳	5.1	7.8	7.7

<女性>

生涯の結婚意志	1992年	1997年	2002年
いずれ結婚するつもり	90.2%	89.1	88.3
一生結婚するつもりはない	5.2	4.9	5.0
不詳	4.6	6.0	6.7

(出典：国立社会保障・人口問題研究所 2002「第12回出生動向調査」より作成)

しかし、1年以内に結婚する意志があるかどうか、という質問に対して「まだ結婚するつもりはない」と回答した人は男女ともに20代後半から増加の傾向にあり、結婚を先延ばしにする意識が高まっていると推測される。

表2-2 「まだ結婚するつもりはない」と回答した未婚者の割合

年齢	男			女		
	1992年	1997年	2002年	1992年	1997年	2002年
18～19歳	85.7%	80.6	69.6	76.5%	76.8	76.7
20～24歳	72.1	67.4	70.8	55.7	53.9	56.0
25～29歳	37.5	42.7	45.1	19.7	26.9	29.3
30～34歳	12.8	21.5	25.9	14.0	18.4	16.1
総数	59.3%	56.5	55.9	50.7%	47.7	46.3

(出典：国立社会保障・人口問題研究所 2002「第12回出生動向調査」より作成)

これらのことから、現在、日本では『負け犬の遠吠え』で述べられているように晩婚化、未婚化、そして少子化が進みつつある。しかし、生涯結婚しない、と決めた人が多くなったわけではなく、多くの人はいつか結婚しようと思いつつ先延ばしにしている、ということが分かる。

『負け犬の遠吠え』の中にも「日本に住む雌雄の負け犬達は、結婚をしないで子供を産み育てているわけでもなければ、結婚をしない方が良いという確固たる信念を持っている

わけでもありません。オスモメスモ(略)”結婚したい相手もないし、しないているか”程度の気持ちで、ただ漫然と歳をとっていただけなのです”(酒井 2003)という記述が見られる。

2.2 家族社会学からみる日本の家族

(1) 「普通」の結婚、家庭

『負け犬の遠吠え』の中には、負け犬と比較して、「勝ち犬」という存在が紹介されているが、酒井は、「勝ち犬」を「普通に結婚して子供を産んでいる人達」(酒井 2003)と定義している。「普通」とはどういう状態か、ということには全く言及していないので、酒井が説明するまでもなく、読者にとって「普通の結婚」は、容易に想像がつくようなものである、ということが分かる。また、酒井は、「負け犬」の定義を、「いわゆる普通の家庭というものを築いていない人」(酒井 2003)としているので、「普通結婚」をした結果、「普通の家庭」が作られると考えてよいだろう。

では、読者が「普通の結婚」「普通の家庭」と聞いて、思い浮かべるものは、どのようなものだろうか。私自身の家庭を振り返ると、サラリーマンの父に、専業主婦の母、子供は私ひとりという核家族で、家族内では性別役割分業がなされている。酒井も、出版社支社長の子と、専業主婦の母という家族構成のもとに生まれている。酒井が述べる「普通の結婚」「普通の家庭」が特に注目を集めたという事実はないので、現代日本において、多くの人にとっては私自身の家族のような家族が「当たり前」として受け入れられていると考えられる。

では、この「普通の結婚」「普通の家庭」は、一体いつから普通になったのだろうか。

そこで、この第2節では『21世紀家族へ』(落合恵美子 2004)と、『モダンガール論』(斉藤美奈子 2003)を参考に、日本の家族史を見ていく。

(2) 「近代家族」について

酒井が「普通の家庭」と表現し、私自身もまた普通だと思っている家族は、社会学史的には「近代家族」という言葉で説明されるものである。近代家族とは、「家族愛の絆で結ばれ、プライバシーを重んじ、夫が稼ぎ手で妻は主婦と性別分業し、子どもに対して強い愛情と教育関心を注ぐ」(落合 2004)家族である。また、斉藤美奈子は、『サラリーマンの夫+専業主婦の妻+子ども二人』の核家族」が近代家族だとしている(斉藤 2003)。これ

はまさに私自身の家族であり、酒井の家族でもあるだろう。

落合恵美子は、この「近代家族」は、近代という時代の産物にすぎず、それは二回に渡る人口転換の狭間で生まれた、と主張している。戦後には戦後安定した社会の構造が出来上がるまでの時期、安定期、それが壊れていく時期の三つの時期があるとし、落合はその安定期を「家族の戦後体制」と呼んでいる。安定期は1955年～75年まで続き、「近代家族」の特徴の殆どはこの時期に形成されている（落合2004）。

そこで、「近代家族」の中身である「妻＝専業主婦」「家族＝核家族」「子供＝二人が普通」というイメージがどのようにできたかを探っていく。

（3） 「妻＝専業主婦」規範

まず、酒井氏が「勝ち犬」と評している専業主婦だが、この「女性が結婚したら、専業主婦になる」というイメージはいつできたものなのだろうか。落合は、総務省統計局の「労働力調査」のデータを用い、女性の労働力率の変化を出生コホート別に見た場合、1926年～30年生まれから、1946～50年生まれにかけて、M字の底が深くなってゆくことを示した。

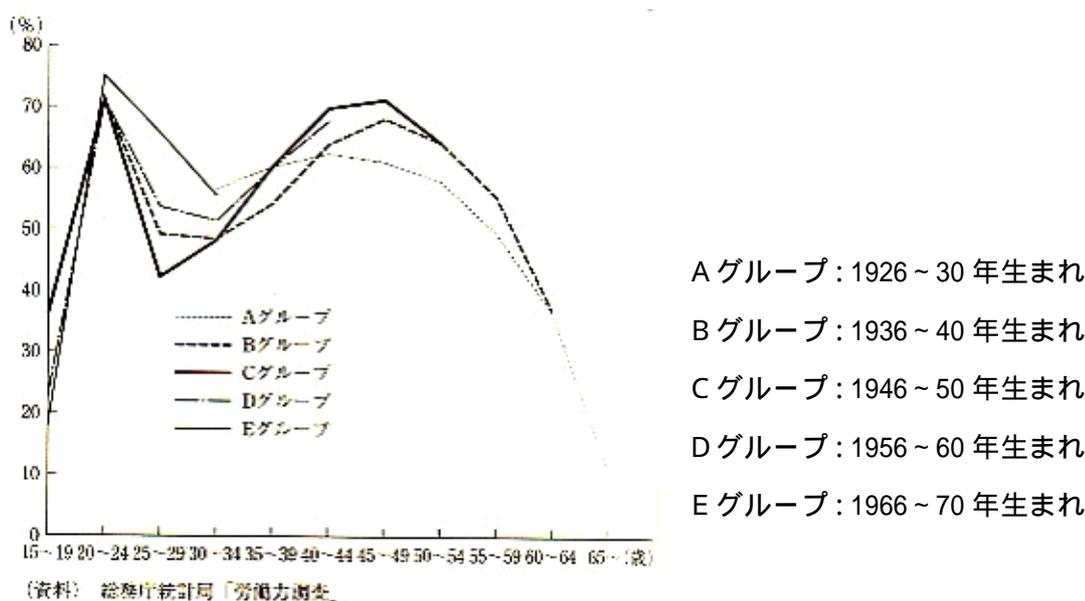


図2-4 出生コホート別年齢別女子労働率

(出典：「21世紀家族へ」落合恵美子 2004 有斐閣社)

つまり、戦後女性は社会進出したのではなく、主婦化したのだ、ということをはっきりとしたのである。これは、戦後産業構造が高度経済成長に伴い、農家や自営業を中心とする

社会から、サラリーマンを中心とする社会に転換したため、女性の立場が「農家の嫁」から「サラリーマンのおくさん」に変化したためである（落合 2004）。主婦化した人口が多かったために、結婚したら、妻は専業主婦になるというイメージが作られたのである。

齊藤美奈子によると、この「農家の嫁」から「サラリーマンのおくさん」への変化は、大正期にも起こっていた。大正期は、産業構造が農業中心から商工業中心へと変化し、都市人口が急増した時期であり、「専業主婦」という言葉はこの時期に誕生した。勿論、この時代は専業主婦になれる女性はごく一部の上流階級の人であり、それだけに「専業主婦」という立場はその他の女性から羨望の眼差しで見られていた（齊藤 2003）。

酒井は 1966 年に生まれているので、その母親はちょうど産業構造が転換しつつある時代に結婚し、専業主婦になったと思われる。そのころ、周りにも同じような家庭があふれていたため、酒井氏がそれを普遍的家族と思い育ったと考えられる。

（４） 核家族が主流になった原因

次に、現在「普通」の家族、と思われている核家族について述べる。

落合は、核家族は人口転換によって生まれたと主張する。人口転換論とは、「近代化が進むと多産多死型から少産少死型へと社会の人口の構造が変化する傾向がある、という理論」（落合 2004）である。落合は、1925～50 年生まれの世代を人口転換の移行期とし、「移行期世代の人たちが結婚して家族をつくる主流だった時代、それが家族の戦後体制」（落合 2004）なのだ、と述べている。この移行期世代は人口で見ると、上の世代に比べて約 2 倍の人口規模がある。この移行期世代は兄弟が多く、地方の次男、三男は都会に出てサラリーマンとなり、核家族を形成したために、結果として核家族の数が増大することになった。

（５） 子供の数の画一化

次に、家庭内の子供の数は大体二人が「普通」だというイメージがどこからきたかを述べる。出生コーホート別に見ると、1928～31 年生まれの戦後まもなく結婚した世代から、出生児数は、3～4 人中心から、2 人が圧倒的に多くなる。戦後は、女性の主婦化と子供の数長方において、画一化が進んだ時代だったのである（落合 2004）。

女性の主婦化には日本の産業構造の転換が大きく関わっていたが、子供の数が 2 人に画一化された背景には何があったのだろうか。

落合によると、ひとつには子供の価値が、農村社会では働き手としての「生産財」だったものから、サラリーマン社会では親の楽しみに使うための「消費財」へと変化した。ま

た、17～18世紀、中産階級の子供が学校に行くようになったことによって、子供が「小さな大人」から「可愛がり、教育すべき存在」へと変化した。それによって、育てるコストが増大し、子供の数が2,3人に制限されるようになった、というふたつの原因を挙げている。落合は、そのように戦後みんなが結婚して2,3人の子供がいる家庭を作る社会を、「再生産平等主義」と名づけている（落合 2004）。

（6）まとめ

以上のことから、酒井が『負け犬の遠吠え』の中で述べている「普通」の結婚、出産というものが、実は戦後の限られた安定期（1955年～75年）に作られたものだということが分かる。安定期は1975年以降崩壊し、「個人を単位とする社会」（個人が社会・生活・経済の単位で、性差や結婚というものが人間を見るうえで無関係になる社会）（落合 2004）へと移行していく。しかし、酒井は1966年に誕生しているため、安定期に作られた「普通」の結婚、家庭にそのままあてはまる家族の中で成長してきたと考えられる。酒井が「負け犬」「勝ち犬」と呼ぶ30代以上の女性も、この時期に生まれている。故に、『負け犬の遠吠え』の中で描かれる既婚女性としての「勝ち犬」像は、酒井自身の家庭を反映している部分が多いと思われる。

2.2 『負け犬の遠吠え』以前

日本において、30代以上の女性の「結婚・未婚」をめぐる著作物は多く出版されてきた。ここでは、その流れの中で、『負け犬の遠吠え』がどのような立場をとっているのかを考察する。

（1）『クロワッサン症候群』について

『クロワッサン症候群』（松原惇子 1988）は、「クロワッサン」という女性誌の、独身女性を賛美するような内容に踊らされた結果、望んでいなかった「未婚」という事態に陥ってしまった30代以上の女性（当時）を取り上げている。

「クロワッサン」が平凡出版社（現マガジンハウス）から出版されたのは、1977年のことだった。これは第2節で述べたとおり、戦後の安定期が終わり、個人単位の社会へ移行していった時期である。「クロワッサン」は、読者を団塊の世代にしぼり、最初「ふたりで読むニュー・ファミリーの生活誌」という売り文句で登場した。このニュー・ファミリーとは、人口が多かった段階の世代が作ると思われていた家庭である。1946～50年生まれの女性は、第2章でみたように、いっせいに主婦化している。しかし、落合恵美子によると、

80年代になると、この女性たちは一斉に再就職しだしたのである。そして図2-4にあるように、団塊の世代から一つ若い世代から初婚年齢が上昇しだし、労働力率も上昇している。「主婦離れ」ではなく、そもそも「主婦にならない」という選択をする女性が増えてきたのである。(落合 2004)

ニュー・ファミリーを作ると思われていた世代は、主婦になったままではなく再就職しだし、その次の世代もなかなか主婦にならないという状況をうけ、「クロワッサン」は「女の新聞」として生まれ変わった。『クロワッサン症候群』では、「クロワッサン」の特徴と、それがどのように当時の女性に影響を与えていたかが書かれている。

「クロワッサン」の特徴としては、「結婚からの開放」を謳う女の自立を叫ぶのではなく、女性文化人を誌面に登場させることによって「新しい女」とはどういうものかを視覚を通して訴えた。という2点が挙げられる(松原 1988)。

この場合、女性文化人とは市川房江、桐島洋子、向田邦子などであり、彼女達の共通点は、離婚歴があったり、未婚の母であったりと、「普通の結婚をしていない」ことである。当時のいい女の条件とは、「キャリアを持ち、それでいて自由に束縛されず、知的で、かといって男っ気なしではなくいつも恋をしている」(松原 1988)であった。

これらの条件は、酒井が述べている「負け犬」に当てはまる。酒井は、負け犬は仕事ができる人が多く、おしゃれで、恋愛体質であると描いているのである(酒井 2003)。現在「負け犬」とされる女性像は、70,80年代当時は女性の憧れの生き方であり、むしろ「勝ち」であったといえる。

しかし、松原は30代の未婚女性にインタビュー調査を行った結果、誰もが望んでOLになっているわけではないことを明らかにした。『クロワッサン症候群』の後半では、むしろ主婦の方が向いていると思っているのに、すぐに仕事を止めることもできず、結婚することもできず、やむなく海外旅行や留学をして将来を先延ばししている女性が描いている。

「クロワッサン」で紹介されていたような女性はごく一部の成功した女性であった。しかしその層は、現在はもっと下のほうへ降りてきてしまっている。当時の雑誌で取り上げられるような憧れの女性は、現在はもっと「当たり前」になってきているのだ。当時の「クロワッサン」のように、女性が働くことを特に賛美するような雑誌も無くなった。現在は「クロワッサン症候群」と呼べるような女性は少なくなっていると考えられる。

(2)『<未婚>のすすめ』、『パラサイト・シングル』について

『クロワッサン症候群』では、主婦になりたくてもなれない女性が描かれていた。しかし、約10年後出版された『<未婚>のすすめ』(森永卓郎1997)の中で森永は、日本の税制、年金制度や結婚や子育てのコストを挙げ、今や「非婚」でいる方が経済的には得なのである、と主張している。

また、森永によると、高度成長期以降の日本の家族を形成した基本理念は、恋愛と結婚とセックスの三位一体主義(ロマンチックイデオロギー)であり、近年、それは崩壊しつつある(森永1997)。しかし、恋愛が結婚の必要条件である、ということとセックスには恋愛が必要条件である、というふたつは崩壊せずに生き残っている。この恋愛がからむ二つが残っている状況を、森永は「恋愛至上主義」と呼んでいる(森永1997)

また、このような従来型の恋愛、結婚システムが残っている理由として、森永は「日本人、特に女性の間にもオンリーユー・フォーエバー症候群が広がっているから」(森永、1997)であると主張している。

このオンリーユー・フォーエバー症候群は、戦後進駐軍により再び日本に入ってきたキリスト教の影響であるとし、戦後のアメリカ人のライフスタイルが日本人にとっては強い憧れであったため、その恋愛・結婚スタイルまで真似をしたのではないかと、というのが森永の主張である。

森永は、オンリーユー・フォーエバー症候群が広く日本に広まった原因として、「愛の歌」「恋愛ドラマ」「恋愛小説」などの戦後文化を挙げている。

森永は、このオンリーユー・フォーエバーという概念を終身雇用制にたとえ、経済システムの変化に伴い、概念自体も揺らいでいこうと述べている(森永1997)

しかしながら、『負け犬の遠吠え』の中では「やっぱり子供を産むなら、愛し合った人に望まれた結果として妊娠したい」や「私達は『モテる人が偉い』という価値観の中で生きてきた」(酒井2003)という記述が見られる。つまり、森永が主張したようにオンリーユー・フォーエバーは完全には消え去っていないのであり、「恋愛至上主義」もいまだに残っているのである。

一方、『パラサイト・シングル』(山田昌弘1999)では、「学卒後もなお親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者」(山田1999)を「パラサイト・シングル」と呼び、この階層の増大によって晩婚化、未婚化が起こり、結果として少子化が起こっていると主張している。また、「パラサイト・シングル」は、社会人として働いて収入を得る反面、家庭においては未だに子供の立場を享受している、大人と子供の「いいとこどり」をして

いる、という(山田 1999)。

『負け犬の遠吠え』の作者である酒井順子氏も、28歳になるまでは実家で親と同居生活をしてきたというので、「パラサイト・シングル」の時代は長かったといえる。

この「パラサイト・シングル」が増大したのは、1980年代である。高度経済成長により、地方で育った若者は、1960年代になって大量に大都市圏に流入した。これらの若者は、1947年から1950年生まれの団塊の世代である。彼らは第2章で述べたように都会で核家族を形成した。そして、その子供が成人し始めるのが1980年代後半である。もともと大都市圏で生まれ育った団塊ジュニア世代の人たちは、大学や就職のためにわざわざ実家を離れる必要がないため、「パラサイト・シングル」となったのではないかと山田は分析している(山田 1999)。

また、山田は日本社会に生じている未婚化、晩婚化の傾向にはパラサイト化と根強い専業主婦志向がある、と主張する。そして、この両者は「他者への依存」という点で似通っている、とする。つまり、やはり従来型の結婚システムへの固執が、女性の晩婚化・未婚化を促進している、というのが山田の主張である。

(3) 『結婚の条件』について

最後に、『負け犬の遠吠え』とほぼ同じ時期に発表された『結婚の条件』(小倉千加子 2003)を挙げる。

小倉は22歳から39歳までの未婚女性52名にインタビューを行っているが、その結果、女性の結婚相手に望む条件は、最終学歴によって決まる、ということを示した。まず、地方在住の高卒者にとって、結婚は生活財産であり、結婚しなくては食べていけない。未婚者は住みづらくなるために都会に出てきている。しかし都会に出て、高卒者の労働条件は劣悪であるために転職に転職を重ねる生活をしている。そのため、最終的には自営業者になることを夢みているが、店を開けるだけの貯金はなく、よって「ある程度の預金を持っている人」が結婚の条件となる。しかし、条件に合うような男性はなかなか現れないために、じりじりと生活は苦しくなっていく。小倉は、高卒の未婚女性の結婚は、「生存」を賭けた最後のチャンスだ、という(小倉 2003)。

次に、短大卒の女性であるが、31~35歳の人たちはバブル期入社をして、ほぼ4年で退職し、家事手伝いになっているか、パラサイト・シングルになっているかという。彼女達は専業主婦志向が強く、安心して子育てができ、給料をきちんと運んでくれる男性、というのが結婚の条件となっている。小倉は、彼女達が結婚に求めているのは「依存」で

ある、と述べている。前述の『パラサイト・シングル』で述べられていることと全く同じである。

また短大卒の女性は、結婚後には「夫は仕事と家事・妻は家事と趣味的仕事」という性別役割を望んでいる。小倉は、そのような傾向を「新・専業主婦志向」と呼んでいる。

4大卒の女性については、結婚によって自分の今の生活が変わることを恐れており、結婚に求めているものは今の生活の「保存」である、としている（小倉 2003）。酒井も『負け犬の遠吠え』の中で、「猫と持ちマンションごとの私を好きと言ってくれ」と言う女性像を紹介している。（そんなことを言っていたら結婚できない、という例の中である。）

このように学歴によって結婚に求めているものが違い、またそれに当てはまるような男性はどの条件に対しても居ないために、晩婚化、未婚化が進んでいる、というのが小倉の意見である。

小倉は、また「VERY」「STORY」という光文社の雑誌を挙げ、その中に描かれている専業主婦像が、「新・専業主婦」であるとしている。酒井順子氏が「勝ち犬になるために読む雑誌」として挙げているのも、「AERA」の「勝ち犬が読む雑誌」（2004.2.9）という記事の中で取り上げられているのも「VERY」と「STORY」である。

小倉は、子供が学歴達成する過程で、親の階層上昇の期待が内面化されるために、子供世代の間で同じ階層内の友人と同調競争が起き、それが就職と結婚の際にも最大の動機として働く、と主張する（小倉 2003）。「もっといい生活」を求めて、結果として晩婚が起きている。小倉は、「そこから生き延びるのは、お金を持った男を捕まえるという個人戦あるのみである。」（小倉 2003）と断じている。

（4）まとめ

これまでみてきたことから、戦後未婚女性の結婚観が、団塊の世代が作った「近代家族」に左右されてきたことが分かる。そして、『負け犬の遠吠え』の中にも、「近代家族」が「普通の」家族として登場している。また、森永（1995）がいうオンリーユー・フォーエバー症候群も未だに消えていないし、『負け犬の遠吠え』の中には、当たり前のように負け犬のひとつの形として「パラサイト・シングル」が登場する。

『負け犬の遠吠え』は、「結婚していないことを素直に負けと認めよう」と呼びかけた本である。「負け」という言葉を出すことによって多くの方面からの反響を得たが、「負け」を認めたことによって、「女性は結婚しなくてはいけない」という30代女性の中にある、親

から受け継がれたイデオロギーがかなり根強いものである、という事実がくっきりと浮かび上がったのである。

2-4 イデオロギー解析へのアプローチ

(1) 知識社会学について

ここで、イデオロギー解析をするために用いる知識社会学について述べる。

杉本良夫とロス・マオア¹⁾によれば、知識社会学とは、「知識がある文化の中でどのように発生するか、知識がその文化の中ではある形態をとって他の形態をとらないのは何故か、知識は文化の中でどう維持されるか、知識はその文化の中の人びとの社会行動にどんな影響を及ぼすか こういった過程を研究する」(杉本、ロス・マオア 1982) 学問である。ここでは、知識社会学をどのように本稿で扱うかを述べる。

本稿では、「負け犬」という概念をひとつのイデオロギーとして捉えている。イデオロギーとは、その社会の中にいる人々の行動を決定づける考え方や概念を指す。

「負け犬」という言葉と考え方は、多くの方面からの反響を得たし、テレビでは未婚女性を表す言葉として今では当たり前のように使われている。

しかし、『負け犬の遠吠え』で述べられていることは、本当に「未婚、子ナシ、30代以上の女性」(酒井 2003) に一般化できることなのだろうか。負け犬が増加しているから、と盛んに言われているが、『負け犬の遠吠え』で描かれているような生活を、社会の中のどの程度の人がしているのだろうか。

また、私は自分が「AERA」を購読していたため、「AERA」で「負け犬論争が起こっている」と書かれれば、それを社会全体の規模の現象だと思ってしまっていたが、「負け犬論争」と言うもの自体は、本当に広範囲に渡って起こっていたのだろうか。

そこで、第3章では、「負け犬」概念を知識として捉え、その知識が本当に社会において一般化できるものなのか、そして社会の中でどのように流通し、広がったか(または実は広がっていなかったのか)を考察する。

(2) 「負け犬」の定義について

酒井は、「負け犬」を、「未婚、子ナシ、30代以上の女性」(酒井 2003) と定義づけているが、『負け犬の遠吠え』の中には小倉千加子(2003)がいうような「生存」のための結婚を必要とする女性は登場しない。そして、「負け犬は、生きることに汲々としなくてもいい」

「お金がかかっていてセンスも良いのが最も負け犬らしいファッション」(酒井 2003) という表現が繰り返し使われているところから、酒井は「負け犬」を高収入の女性だと定義づけていることが分かる。また、高学歴な男性は低学歴な女性と結婚したがるので、高学歴の女性が余ってしまう(酒井 2003) という表現があるとおり、高収入に加え、「負け犬」を高学歴な女性と定義していることが分かる。さらに、「負け犬」を定義する際の方法論的な欠陥として、取り上げるサンプルが作者の酒井氏の身の回りに限っている、ということが挙げられる。

これらのことから、私は「負け犬」という言葉は実は社会の中の限られた階層しか指していない、という仮説をたてた。

また、『負け犬の遠吠え』の中では「負け犬」は「男から求められていない」女性であるし、「勝ち犬」は「男に選んでもらうために女らしさをアピールできた」女性だ(酒井 2003) と述べられている。これは「女の結婚は男に選んでもらうものだ」という現代では古いともいえる考え方である。そして、「負け犬」という言葉も、従来どおりの結婚が本当は正しいものだ、という考えの裏返しである。つまり、これまで語られてきたことをそのまま表現しているだけである。『負け犬の遠吠え』では、酒井が「負け犬」と名づけた女性の生活ぶりが興味をひくが、新しい考え方や生き方は何も述べられていないのである。

それでは、「負け」という言葉以外に新しい考え方がないにも関わらず、何故『負け犬の遠吠え』はあれだけ話題になったのだろうか。もしくは、話題になっていると思っていた範囲が、ごく限られた範囲にすぎない可能性もある。

第3章では、数値データを用い、酒井が定義する「負け犬」はどの程度存在するのかを調べ、酒井が定義するような「負け犬」は、30代以上未婚女性に一般化できるようなものであるかどうかを検証する。

第3章 イデオロギー解析

3-1 「負け犬」の定義について

はじめに、酒井が「負け犬」と定義する存在は、実は社会の限られた階層しか指していないのではないかと、という仮説をたてた。その条件とは、高学歴 高収入である。ここではその仮説を数値的に実証する。

(1) 学歴と職業・賃金格差

まず、女性の就業率をみてる。

図 3-1 から分かるように、M字の底は徐々に右に移動している。現在 39～43 歳までの 1961 年～1965 年生まれの女性と、現在 34 歳～38 歳までの 1966 年生まれ～1970 年生まれの女性ともに、30～34 歳の間に労働力率が低下している。「負け犬」とされるのは 30 代以上の女性だが、どの年代でも 30 代以上の労働力率は 70%ほどである。

では、そのうち酒井が定義するような「負け犬」はどの程度存在するのだろうか。

図 3-2、3-3 を見ると、確かに大卒率は年々上昇しているが、数値を良く見ると、殆どが 20%に満たない。つまり、その他は全て高卒以下ということである。学歴別常用労働者割合をみると、大卒者は 2002 年の段階で 13.8%しかいないのである。

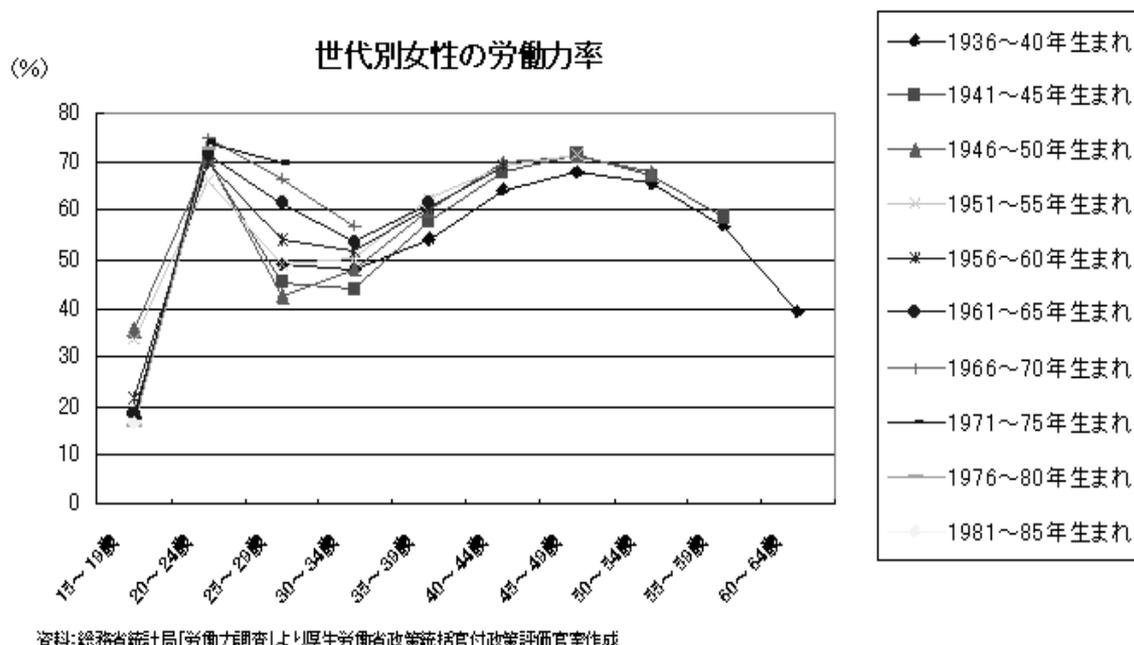


図 3-1 世代別女性の労働力率の変化

(出典:厚生労働省 2002「平成 14 年度 厚生労働白書」)

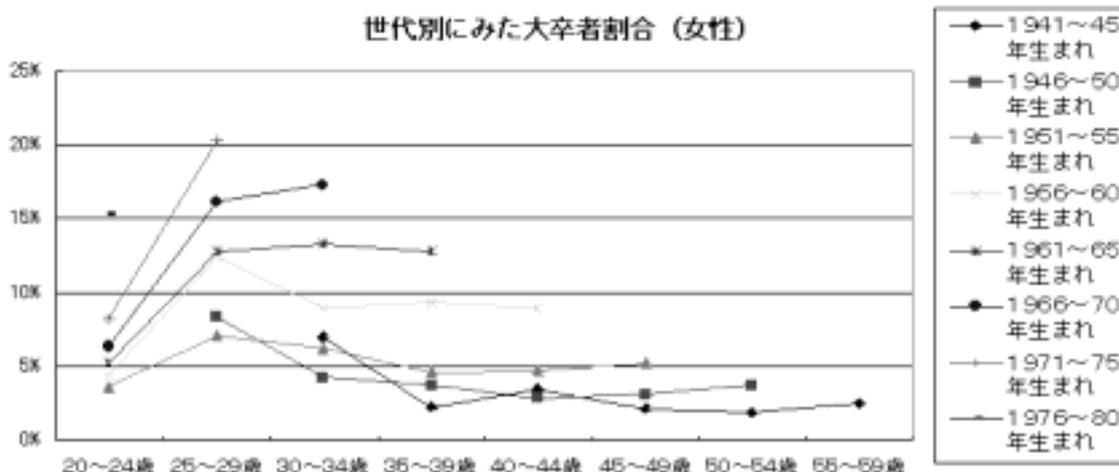


図 3-2 世代別大卒割合

(出典: 厚生労働省 2002 「平成 14 年度 厚生労働白書」)

表 3-1 学歴別常用労働者割合

性、年		計	中卒	高卒	短大卒	大卒
男女計	1990 年	100.0	19.1	52.7	9.3	19.0
	2000	100.0	9.8	50.0	15.0	25.2
	02	100.0	8.3	48.9	15.7	27.1
男性	1990 年	100.0	19.4	50.5	5.0	25.1
	2000	100.0	10.4	49.6	9.1	31.0
	02	100.0	9.0	48.9	9.4	32.8
女性	1990 年	100.0	18.3	57.5	18.9	5.2
	2000	100.0	8.2	51.0	29.0	11.7
	02	100.0	6.7	49.1	30.5	13.8

(出典: 厚生労働省 2003 「平成 15 年度 労働経済白書」より作成)

では、もうひとつの条件である収入はどうだろうか。第 2 章で、小倉千加子 (2003) の高卒女性は結婚に「生存」を求めている、という意見があった。しかし、酒井によれば、

「負け犬は生きることに汲々としなくてもいい生き物」(酒井 2003)であり、高収入の女性が多いはずである。

表 3-2 標準労働者の学歴、年齢階級別男女間賃金格差

年齢階級 (歳)	大卒			高専・短大卒			高卒		
	平成10年	14	15	平成10年	14	15	平成10年	14	15
20~24	95	96	93	95	96	96	90	90	90
25~29	91	91	91	90	92	91	86	86	86
30~34	89	86	87	84	87	86	80	80	82
35~39	87	85	86	83	85	84	78	77	77
40~44	87	87	86	83	82	80	75	79	77
45~49	79	85	84	78	78	79	74	76	74
50~54	85	88	86	68	78	72	74	74	73
55~59	85	89	91	77	83	76	75	77	74

(男=100)

(出典：厚生労働省統計情報部 2003「賃金センサス」)

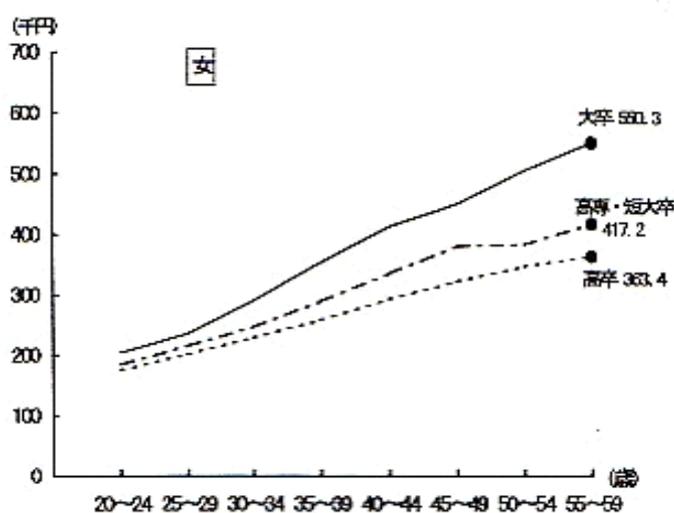


図 3-3 学歴、性、年齢階級別賃金

(出典：厚生労働省統計情報部 2003「賃金センサス 平成 15 年賃金構造基本統計調査」)

図 3-4、3-5 から、女性は大卒であっても男性よりわずかではあるが賃金が低い。それは 30 代に入ると顕著である。高卒の女性にいたっては、男性の 7 割の賃金である。格差は年齢を追うごとに増えていき、大卒と高卒では、最終的には 20 万円以上の差が出ている。

高学歴・高収入の 30 代女性は、実はまだ社会のほんの一部の人にすぎないのである。

次に、30 代以上の女性はどのような職業についているのか、ということと、職業によ

る賃金格差についてみていく。酒井が『負け犬の遠吠え』で述べている「負け犬」女性は、ブランド物をさりげなく身に付けているような女性であるし、「AERA」においても、「負け犬」を現すものとして、エルメスのバーキン(ひとつ100万程度のブランドバッグ)を、海外で自分の収入で買う、という例を挙げている。本稿では、「高収入」を年収800万以上と設定する。



図 3-4 職業別就業者構成比の推移

(出典：内閣府 2004 「男女共同参画白書 2004」)

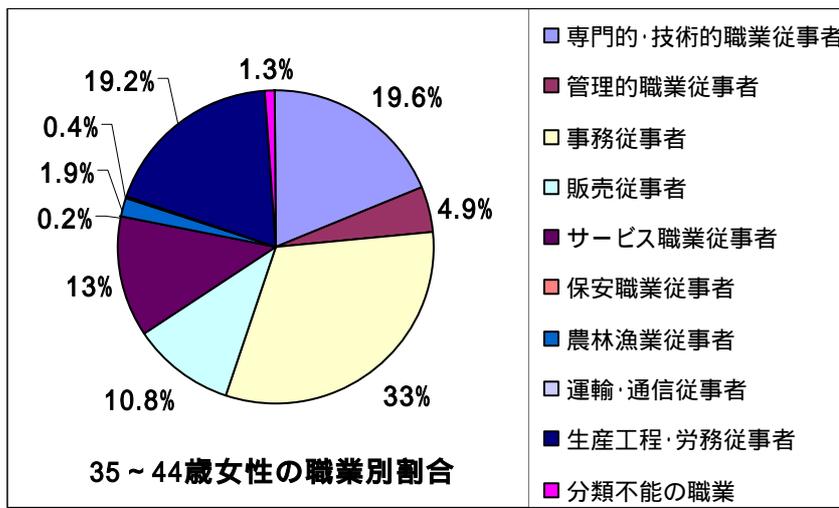


図 3-5 35歳～44歳女性の職業別人口割合

(出典：総務省人口統計局 2002 「平成14年度 就業構造基本調査」より作成)

図 3-4 から分かるように、女性で管理的職業に就いている人は昭和 60 年から殆ど変わっておらず、0.7%前後であり、大部分を占めるのは事務従事者である。「負け犬」世代に限ってみても、やはり事務従事者が一番多い。しかし、これも学歴の視点からみると、大卒と高卒では就く職業が違ってくる。表 3-3 にあるとおり、事務従事者は殆ど大卒なのである。高卒者が就く職業で一番多いものは生産工程・労務作業であり、表 3-4 に見られるように収入には大きな差がある。

また、表 3-4 から分かるとおり、最初に「高収入」の条件としてあげた「年収 800 万以上」をクリアしている女性は、ほんの少数しかおらず、そのほとんどが大卒なのである。

表 3-3 職業別新規学卒就職者割合の推移

高等学校

(単位%)

年	計	事務従事者	販売従事者	生産工程・労務作業者	その他
1990	100.0	28.2	17.0	34.9	9.5
95	100.0	17.4	15.8	39.2	11.6
2000	100.0	12.8	13.3	41.8	12.9
02	100.0	13.3	13.3	39.2	14.3

大学

(単位%)

年	計	専門的・技術的職業従事者					事務従事者	販売従事者	その他
		計	技術者	教員	医療従事者	その他			
1990	100.0	40.5	26.2	8.6	2.6	3.1	37.6	18.4	3.5
95	100.0	26.2	20.5	4.8	2.7	3.1	38.7	23.3	7.0
2000	100.0	31.0	20.8	3.2	4.1	3.9	35.9	22.8	9.4
02	100.0	32.0	19.9	3.7	4.6	4.4	34.7	22.5	10.2

(出典：厚生労働省 2003「労働経済白書」より作成)

表 3-4 35～44 歳女性の職業・学歴・年収別人口

(単位：人)

年収/職業	総数	専門的・技術的職業従事者	事務従事者	生産工程・労務作業者
総数	5,193,400	1,017,900	1,714,200	995,900
うち高卒	2,714,600	196,400	942,100	689,400
うち短大・高専	1,583,100	491,200	530,800	180,200
うち大卒	652,200	312,600	208,500	32,300
50万円未満	416,900	68,000	75,700	
50～90万円	1,304,900	122,200	399,000	137,800
100～149	765,800	78,600	251,100	370,700
150～199	387,900	48,900	140,400	204,100
200～249	423,300	68,000	178,000	79,000
250～299	278,500	54,000	123,500	60,700
300～399	42,1900	13,3600	171,800	32,300
400～499	323,500	126,400	130,800	36,100
500～599	235,600	123,600	80,000	18,500
600～699	156,100	98,900	41,200	4,400
700～799	80,200	53,900	19,900	2,900
800～899	23,600	11,900	6,900	1,200
900～999	8,300	2,800	3,900	700
1000～1499	14,200	6,500	3,200	-
15000万円以上	3100	1,100	1000	0
				-

(出典：総務省統計局 2002「平成 14 年度 就業構造基本調査」より作成)

また、最終的に年齢・産業すべてを足した女性の収入を見ると、300万円以内が半分以上を占めている。700万円以上の方は、男女ともに少数しかいないことが分かる。

このことから、「負け犬」は30代以上の女性の中のほんの一部であると同時に、現代日本の社会において少数派に属することが分かる。

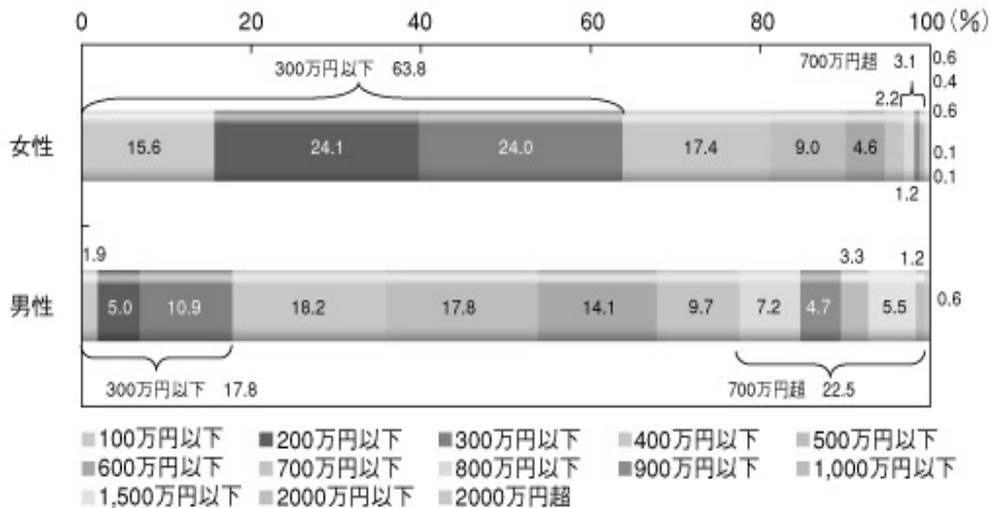


図 3-6 給与階級別給与所得者の構成割合

(出典：内閣府 2004「男女共同参画白書 2004」)

(2) 「負け犬」の定義における方法論的欠陥

酒井が「負け犬」を定義した際の方法論的欠陥として、1項で述べたように、社会の限られた階層を一般化している、そして「負け犬」についての定義が偏っているように「勝ち犬」についての定義も偏っている、数値データではなく、自分の身の回りで起こっていることを基に議論を展開している - と言う点が挙げられる。

ここで、酒井自身の経歴に少し触れておく。酒井氏は、1966年の高度経済成長時に東京の荻窪で生まれている。父は英国系出版社の支店長で、母は専業主婦という家庭であった。そして、小学校から高校まで、立教女学院に学び、大学も立教大学を卒業している。高校生の時から、雑誌にコラムを書き始め、大学卒業後は博報堂に3年間勤め、そのフリーになった(AERA 2004.9.20)。

この経歴を見て分かれるとおり、酒井は前項で数値データによって検証された、ごく少数である「高学歴・高収入」の女性であることが分かる。小学校から有名私立女子校に通っていたということから、おそらく友人の多くは大学進学を選んだであろうし、立教大学卒業後も大手の企業に入社した人が多かったと思われる。

『負け犬の遠吠え』の本文中でも、「負け犬」または「勝ち犬」の例として出されるのは、会社にいたころ周りにいた女性、もしくは自分の同級生に限られている。「高学歴・高収入」という条件が揃わなければ、酒井氏が定義する「負け犬」になれないのと同様、やはり「高

学歴・高収入（夫が）」でなければ、「勝ち犬」にはならないのである。

(3) まとめ

以上のことから、「負け犬」という概念は単純に「未婚、子ナシ、30代以上の女性」(酒井 2003)の同意語として一般化できるものではなく、実は「高学歴・高収入」という数値的にも社会的に限られた存在を指しているものである、ということが明らかになった。

また、酒井が「負け犬」を暗に「高学歴・高収入」の女性と設定したのは、彼女自身の経歴と、同じような経歴を持った人で交際関係が固められていることによる。

よって、「負け犬」とは非常に狭い社会を指したものであり、現在の日本に「負け犬」に当てはまる女性は非常に少ない、というのが仮説に対する解答である。

3-2 「負け犬」についての記事掲載数・掲載雑誌からみえるメディア戦略

(1) 記事総数

ここでは、雑誌上で、「負け犬」に関する記事がどれだけ取り上げられたかを調べることにより、社会の中に「負け犬」という知識がどのように広がっていったかを明らかにする。

調査方法として、「マガジンプラス」と「大宅荘一文庫」の2つのデータベースで「負け犬」「酒井順子」をキーワードにして検索を行った。

まず、『負け犬の遠吠え』が発売されたのが、2003年の11月であるので、対象期間は2003年11月から2004年11月とする。基本的に、「負け犬」や「酒井順子」をテーマとして扱っている記事はすべて対象としたが、「未婚、子ナシ、30代以上の女性」(酒井 2003)が主題となっていないもの(酒井氏の他の著作に関する記事など)は数に入れていない。

図3-7にあるように、「負け犬」に関する記事系整数には2004年3月、7月、9月と3つのピークがある。2003年11月から1年に渡って、ほぼ同じペースで「負け犬」が記事になってきたということがわかる。

また、『負け犬の遠吠え』が出版されたばかりの時、「負け犬」に関する記事を書いたのはたった1誌しかない。「負け犬」という言葉が市民権を得始めたのは、図3-7にあるように、2003年3月からである。

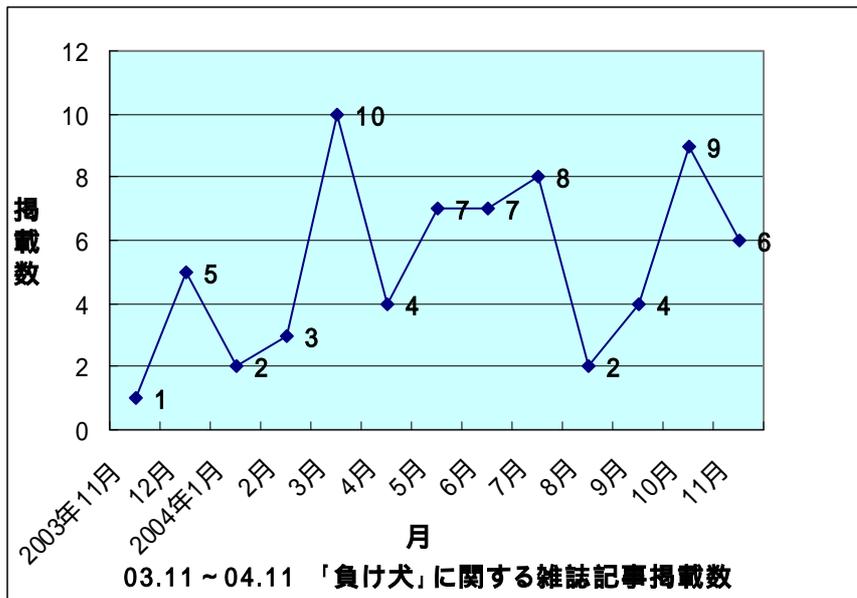


図 3-7 「負け犬」に関する雑誌記事掲載数

(2) 掲載雑誌からみえる傾向

では、具体的にはどういった雑誌が「負け犬」に関しての記事を掲載していたのだろうか。調査の結果、掲載雑誌には非常に偏りがあることが明らかになった。

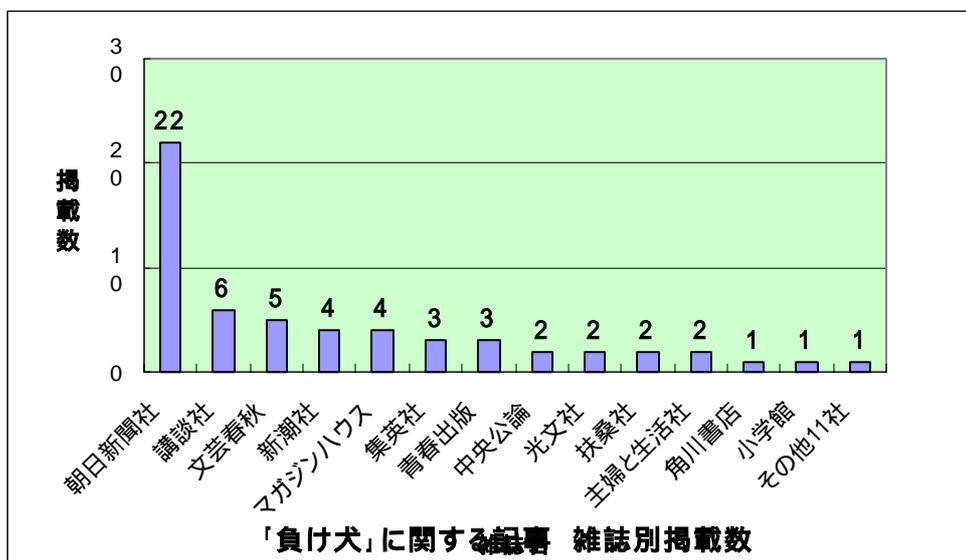


図 3-8 雑誌別掲載数

図 3-8 を見ると、大手出版社の雑誌は、一回は「負け犬」を取り上げていることが分かる。掲載された雑誌は 31 誌に上ることから、広範囲にわたって取り上げられたのは確かだ

ある。しかし、図 3-9 をみれば明らかなように、朝日新聞社系の雑誌（「A E R A」「週刊朝日」）が他の大手出版社の 3～20 倍の「負け犬」に関する記事を掲載していたのである。

他の雑誌は、同一の出版社から多数の雑誌を発行しているために、出版社別にみると 4,5 回の掲載であっても、雑誌別では一回きりの掲載である場合が多い。

『負け犬の遠吠え』を出した当の講談社は、2 位ではあるが朝日新聞社系の雑誌には遠く及ばない。

先程の図 3-7 に、朝日新聞社系の雑誌の月ごとの掲載数を一緒に載せてみると、各誌で「負け犬」に関する記事を載せ始めた 2003 年 3 月に、やはり「A E R A」「週刊朝日」での掲載数が伸びている。

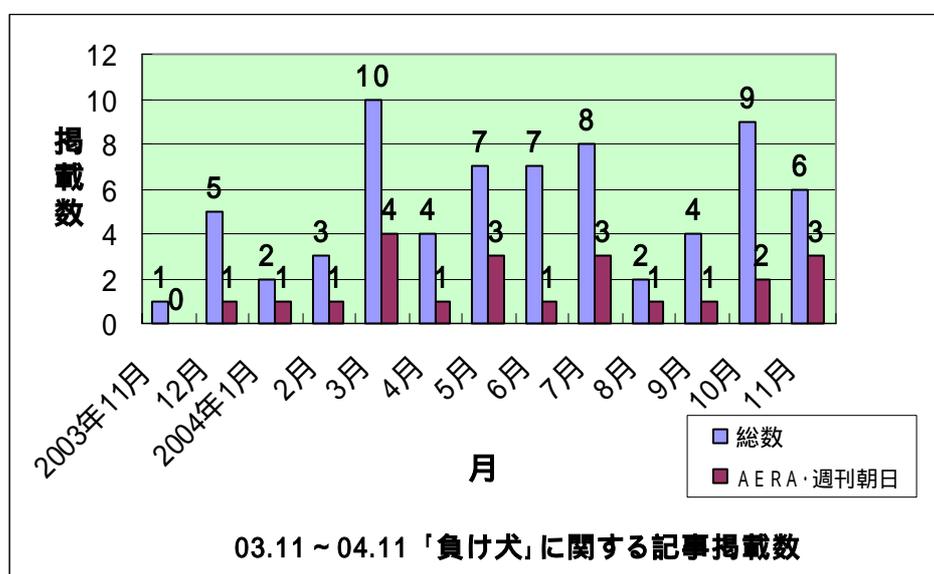


図 3-9 総数と朝日新聞社系雑誌の掲載数比較

そこで、記事の取り上げられ方にも注目してみたい。

『負け犬の遠吠え』が出版されてすぐに「負け犬」に関する記事を出したのは、「O Z magazine」(スタート出版)である。このときは、「現代日本に増殖する“負け犬”の正体とは？」という見出しであった。このような「負け犬とはなにか？」という記事から「負け犬賛成派・反対派」の対立、という「論争」として「負け犬」に関する記事を出したのは、「週刊文春」(文芸春秋社)の 12 月 25 日号である。週刊文春は、「大論争勃発 問題の書 三十代、独身、子供を産まない女は『負け犬』か？」というタイトルを掲げている。

そのすぐ次の月、2004年1月に、「AERA」が『「負け犬女」はどっちだ『負け犬論争』』という記事を出し、続く2月、3月では「負け犬」に関する特集を組み、「負け犬」男のことから、「負け犬」の親世代にわたって記事を掲載し続けている。しかし文芸春秋社は、2月にもう一回記事を書いたあとは7月に「諸君」で酒井順子氏と上坂冬子氏の対談を掲載するまで、一回も「負け犬」に関する記事を掲載していないのである。

先程、「負け犬」に関する記事の掲載数には3回のピークがあると述べたが、3回とも、同じ雑誌が多くの記事を書いていた、というわけではない。3回ともその中身となる雑誌は異なるのである。

表 3-5 ピーク時における掲載雑誌 朝日新聞社系雑誌との比較

掲載雑誌/月	3月	7月	10月
・AERA	3回	1回	1回
・週刊朝日	1回	2回	1回
・その他 雑誌名/出版社名	・ダカーポ(マガジンハウス) ・Yomiuri Weekry (読売新聞社) ・週刊ダイヤモンド (ダイヤモンド社) ・SPA!(扶桑社) ・週刊プレイボーイ (集英社) ・週刊女性 (主婦と生活社)	・婦人公論 (中央公論社) ・SAY (青春出版) ・諸君 (文芸春秋) ・コスモポリタン(集英社) ・BIG Tomorrow (青春出版)	・週刊新潮 (新潮社) ・週刊文春 (文芸春秋) ・SPA! (扶桑社) ・FLASH (光文社) ・FRAU (講談社) ・テレビプロス (東京ニュース通信社) ・正論 (産経新聞社)
計	10回	8回	9回

このように、ピーク時においても、様々な雑誌が一回ずつ掲載しているにすぎないのに対して、朝日新聞系は常に2回以上は「負け犬」に関する記事を掲載している。

また、表 3-5 には「Yomiuri Weekry」と「正論」という、読売新聞社と産経新聞社の新聞社系の雑誌が登場している。このほかの新聞社系の雑誌で「負け犬」に

関する記事を掲載したのは、2004年2月19日「日経ウーマン」(日経新聞社)、6月29日の「週刊エコノミスト」(毎日新聞社)である。

(3) 新聞記事掲載数からみえる傾向

そこで、今度は雑誌だけではなく、新聞に掲載された「負け犬」についての記事の数をみていく。

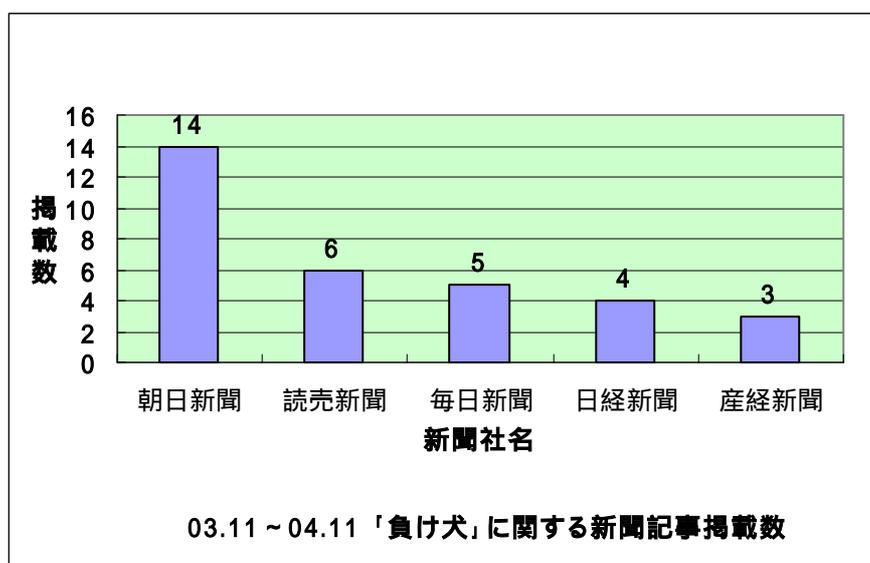


図 3-10 「負け犬」に関する記事掲載数 新聞社比較

図 3-10 にあるように、新聞記事でもやはり朝日新聞が最も多く「負け犬」に関する記事を掲載していることが分かる。

これらのことから、雑誌においても、新聞記事においても、朝日新聞社が集中的に「負け犬」に関しての記事を掲載していたことが分かる。

(4) 朝日新聞の読者層

次に、「負け犬」を集中的に取り上げていた朝日新聞が、どのような人に読まれているかをみていく。

まず、年齢だが、男性、女性ともに 50 代の読者の割合が多い。
また、パーセンテージでみると、30 代以上の女性の割合は朝日 39%、読売 36%、産経 38%、日経 36%と、朝日が一番多いのである。

各新聞購読者の性・年齢構成

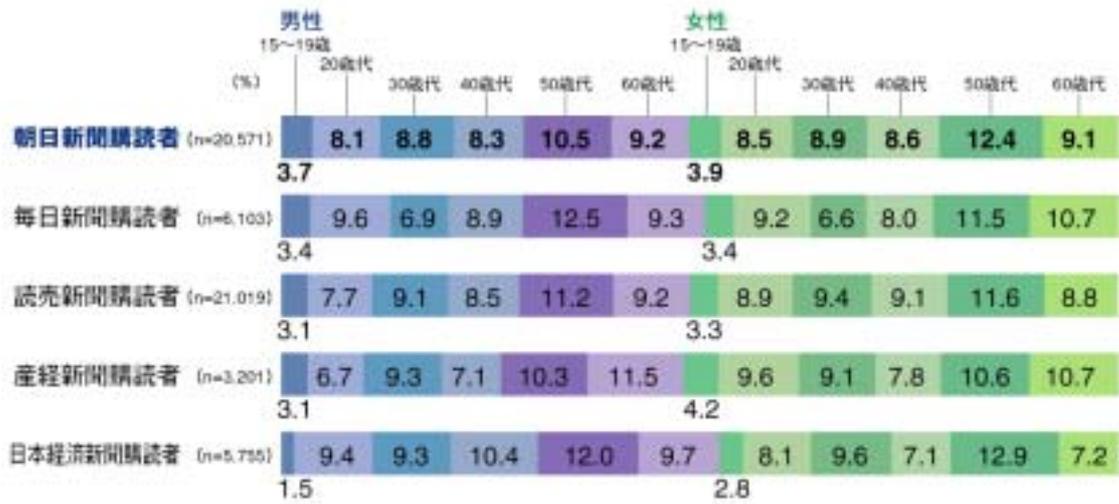


図 3-11 朝日新聞と他紙の読者層

(出典：朝日新聞広告局 2004)

また、階層と言う視点から、朝日新聞の読者層をみってみる。



図 3-12 朝日新聞と他紙比較 1 購読者の学歴割合

(出典：朝日新聞社広告局 2004)

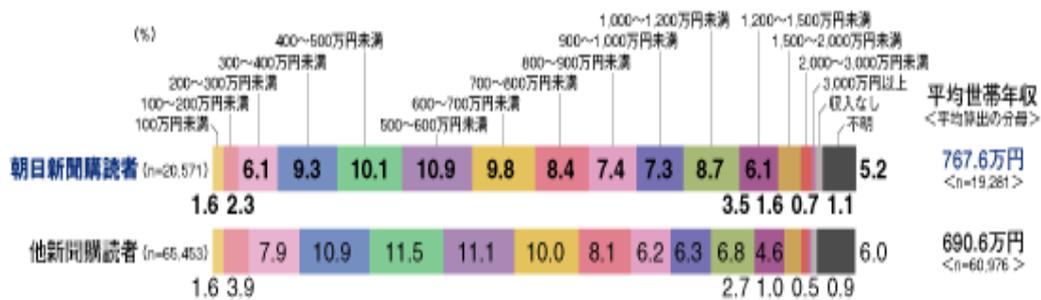


図 3-13 朝日新聞と他紙比較 2 購読者の世帯年収

(出典：朝日新聞社広告局 2004)

図 3-12、3-13 から分かれるとおり、朝日新聞の購読者は、他紙にくらべて高学歴者・高所得者の割合が高いのである。これは、3-1 で実証したように「負け犬」の条件にあてはまる。

3.3 まとめ

これまでみてきたことで、「負け犬論争」と言われたものの背景には、朝日新聞社という限られたメディアが集中的に「負け犬」について取り上げていた、という事実があることが明らかになった。

様々な雑誌にわたって取り上げられたことは確かだが、その殆どの雑誌は一回取り上げただけにすぎない。それに対し、朝日新聞社系の雑誌は繰り返し特集を組み、1 年間にわたり毎月一回は「負け犬」に関する記事を掲載してきた。

そして、朝日新聞の読者には他紙に比べて高学歴・高所得者が多く、また 30 代以上の女性の割合も高いため、酒井氏がいう「負け犬」にあてまる女性読者が他紙よりも多いことが考えられる。

これらのことから、「負け犬」論争は朝日新聞が中心となって作り出したものであり、「論争へ参加していた「AERA」や朝日新聞の読者も、「高学歴・高所得者」という限られた階層の人であった可能性が高い、と言える。

よって、「負け犬論争」は、酒井氏が述べている「負け犬」自身が「負け犬」についての論争を展開していたにすぎない、考えられる。

第 4 章 考察

4.1 「負け犬」は真実だったか

これまでみてきたことにより、『負け犬の遠吠え』の中で述べられていることは、団塊の世代が作ってきた結婚・家族像の裏返しであること、「負け犬」はそもそも社会の中の限られた階層しか指していないこと、そして「負け犬論争」というものは実は限られたメディアによって引き起こされた現象であることが明らかになった。

「負け犬の遠吠え」は真実だったのか、という問いに対しては、よって「ある限られた階層にとっての現実であり、社会に一般化できる概念ではない」という解答を得た。

また、「負け犬」論争の発端をみるに、メディアが社会の中で果たす役割は大きい。「A E

R A」の2004年2月9日号では、「負け犬女性」をあらゆる指標として、「エルメスのパーキン」を挙げている。「負け犬」=「30代以上の未婚の女性」という枠組みでこの記事を見ると、「多くの30代以上の未婚女性はパーキンを買っている」と思ってしまう。「A E R A」で「負け犬女性」として取り上げられる女性は、年収1千万であったり、マンションを持っていたり、アラブの富豪に口説かれたりする女性ばかりである。確かにそのような女性は増加傾向にあるが、全体で見るとほんの一部であることには、記事を読んでいるだけでは気付かない。

「負け犬論争」に参加した女性を除いて、テレビや雑誌はいとも簡単に「負け犬」という言葉になじんだ。これも、メディアによって「30代未婚女性は金持ちで、自分の趣味にお金をつぎこみ、マンションやブランド物を持っている」というイメージが作られていたことと関係がある。そのようなビジネスの社会では「勝ち」と言われるような存在が、結婚という現代社会の中では崩壊しつつあると見られている、ある種古い制度に適應できない、というだけで自ら「負け」を申し出た、という事実が意外であったから、あれほどメディアに取り上げられた側面もあると考えられる。『負け犬の遠吠え』は、「やはり結婚していることが正しくて、金を稼いでも替えることのできない絶対的な勝利なのだ」という価値観をもう一度社会に植え付ける役割を果たしたのである。

また、「負け犬の遠吠え」という言葉はもともと存在していたが、「負け犬」が「30代未婚女性」を現す言葉として選択されたのは何故だろうか。

「犬」というのは、人に飼われていて、可愛がられるような生き物という印象があるし、酒井氏は『負け犬の遠吠え』の中で、わざと負け犬女性のことを「メスの負け犬」などと呼んでいる。何故「負け女」ではないのだろうか。

小倉千加子氏は、「A E R A」(2004年1月19日号)で、夫を現す言葉として「飼い主」という言葉を使用している。

このことから、「負け犬」に「犬」という言葉が選ばれたのは、犬=人間に飼われるもの
女性=男性に飼われるものである、という考え方によるものだと考えられる。

また、ダイレクトに「負け女」という名前をつけるよりは、「犬」という人間ではない、可愛い生き物を連想させる名前の方が、現実感が少なく受け入れられやすい。

これには「女性」=「可愛い生き物」というジェンダーバイアスが潜んでいる可能性もあるのである。

酒井は、「A E R A」誌上の小倉千加子との対談の中で、小倉に「でも、本当に結婚した

いと思えばできますよ。(略)そもそも、なんで結婚したいの?」と聞かれて、「みんながしてるから・・・」と答えている(AERA 2004.1.19)。

結局、酒井自身も何故社会の中に「結婚していないと女は負けている」という概念が存在しているか、ということをつかからないまま『負け犬の遠吠え』を著しているわけである。

酒井は、自らを「負け犬」と称することを、「『既婚子持ち女に勝とうなどと思わず、とりあえず“負けました~”と、自らの弱さを認めた犬のようにお腹をみせておいた方が、生き易いのではなかろうか?』という意識から来る、一種の処世術」(酒井 2003)としているが、それは一時しのぎの処世術にすぎない。

酒井が「負け犬が『負けてます』と腹をみせるだけでは生きていけなくなる時代が、やってくるのです。」(酒井 2003)と書いている通り、「負け犬」という「知識」は、呼び方の物珍しさによって注目を集めたものの、従来の家族像に縛られている「知識」に過ぎない以上、今後も使われ続ける可能性は少ないと考えられる。

4.2 これからの女性の生き方

最後に、私自身を含め、現在 20 代の女性が今後どのように生きていくかという展望を述べたい。

今後、日本の未婚率は上昇していくであろうし、私にも現在結婚願望はない。しかし、「いつかは結婚するだろう」という考えはもっている。だが、仮に結婚しなかったとしても、おそらく「負けていると言ったほうが楽になれる」とか「負けていることは不幸じゃない」という議論は起こらないと考えている。なぜなら、その時「負けている」「勝っている」という言葉は、結婚に対しては使われなくなると推測するからである。『負け犬の遠吠え』によって、今まで結婚に対して勝ち負けで考えていなかった人(私)までが、勝ち負けに興味を覚えるようにはなったが、それは前述のように一時的な現象である。

私はビジネスの世界と同じように、結婚も能力主義の世界になっていくのではないだろうか、と考えている。つまり、結婚したい人が結婚し、しない人について社会は何も問わない世界になるのではないだろうか。

出生率の低下をいくら説明されても、私はだから結婚して子供を産まなくては、とは考えないし、そう思う人は多く存在しているはずである。そして、社会の方が、やがて少子化の危険性を説くのをやめ、その多数派が生き易い社会へと変わってゆくのではないだろうか、と推測している。

今まで、女性の結婚のあり方や、理想の女性の生き方は時代に沿って変化してきた。「負け犬」という考え方は、従来の結婚・家族モデルから抜け出せないでいる現状を示すことで、「そろそろ新しい考え方が必要である」というメッセージを発しているのではないだろうか。

<注>

- 1) 杉本良夫/ロス・マオア 1982 『日本人論の方程式』による。

1 ページ : 1200 字

総ページ数 : 32 ページ

原稿用紙 : 51 枚

< 参考・引用文献 >

- 松原惇子 1988 『クロワッサン症候群』 文芸春秋
- 森永卓郎 1997 『<非婚>のすすめ』 講談社
- 落合恵美子 2004 『21世紀家族へ(第3版)』 有斐閣
- 小倉千加子 2003 『結婚の条件』 朝日新聞社
- 斉藤美奈子 2003 『モダンガール論』 文春文庫
- 酒井順子 2003 『負け犬の遠吠え』 講談社
- 杉本良夫/ロス・マオア 1982 『日本人論の方程式』 筑摩書房
- 山田昌弘 1999 『パラサイト・シングルの時代』 ちくま新書
- 「AERA」 2004年1月19日号 p16~21
- 2月9日号 p12~16
- 9月20日号 p72~75
- 『労働経済白書』2003 厚生労働省監修
- 『賃金センサス 平成15年賃金構造基本調査』2003 厚生労働省統計情報部編
- 『男女共同参画白書2004』2004 内閣府

< 参考URL >

- 厚生労働省 2002 「厚生労働白書」
- (<http://mhlw.go.jp/wp/hakusho/kousei/02> 2004.10.8)
- 総務省統計局 2002 「平成14年度 就業構造基本調査」
- (<http://www.stat.go.jp/data/shugyou/index.htm> 2004.11.24)
- 内閣府 2004 「男女共同参画白書2004」
- (http://www.gender.go.jp/whitepaper/h16/danjyo_hp/top.html 2004.12.10)
- 国立社会保障・人口問題研究所 2002 「第12回出生動向基本調査」
- (http://www.ipss.go.jp/japanese.doukou12_s,20048.15 2004.8.25)
- MAGAZINE PLUS
- (<http://web2.nichigai.co.jp.2004.11.10> 2004.12.9)
- 大宅荘一文庫
- (<https://www.oya-bunko.com> 2004.12.9)

朝日新聞社広告局

(<http://adv.asahi.com/2005/client/> 2004.12.13)